第三講『雲萍雑志』

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

ある人、予がもとに来たりて、絵に魂を入るると申すことは、いかやうなることをして画き侍れば、魂は入り候ふことぞと問ふ。予こたへて言ふ。すべて絵には限らず、何ごとにても実心を込めてさへいたさば、魂の入らずといふ物あるべからず。他のことはいざ知らず、絵に魂の入りたると思ふは、諸国にて種々名画も多かる中に、我が見し泉州堺に一国寺といふ精舎あり。この寺は千利休もしばらく居(ゐ)(1)られし時、物好きを尽くして、庭園、座敷五間ほどもあり。一間には檜一本を描けり。一間には臥したる鶴二十五羽ばかりを描きてあり。いづれも彩色ありて、古法眼元信の筆と言ひ伝へたり。そのかみ、この絵を画ける画師、この寺に寓居すること、三年ばかりの中に、何一つ画きたることなく、碁を好みて、ただそれのみ日毎の楽しみとして、あるはここかしこ遊び歩くに、はやく三年を経たり。(2)ひとたびだに筆を取りしこともなきは、いかにも心得ざる者かなと思ひて、ある時、住持の申されけるは、そのもと、画をもて一家をなせりと言ひながら、筆を取りたることもなく、囲碁にのみ年月を過ぐさするはいかにや。我れ、衣食の費をいとふ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

にはあらねど、いづこへなりとも遊び給へ。愚老も所用ありて、京へ[a]のぼり、ことによりては一年も在京せむもはかりがたしと言ふに、かの画師聞きて、それこそいと名残惜しきことに候へ。さあらば、年来の恩謝に、何か少しの画を残し参らすべしとて、心構へのみにて、また、四、五日ほど経るに、住持は何を描くと見たくて侍れども、(3)たえて筆を取らず。ある夜、小坊主の住持が居間に夜更けて[b]来たり、ひそかに申すやう、かしこに行き給ひて、そと覗きて、画師のありさまを見給へと[c]ささやきけるに、やがて小坊主にいざなはれて、画師が居間を[d]うかがふに、明かり障子の腰板に身を寄せて、さまざまの姿を[e]変へつつ、寝起きするありさまを[f]見るより、小坊主を引き寄せ、こよかし。覗くべからず。はやく臥せよとて、その身も寝間に[g]入りたり。明くれば画師、(4)まだきに起き出で、一間なる障子に描くを見れば、みな臥したる鶴なり。(5)画勢不凡にして、丹青の妙言ふべからず。さあるに、またの夜はいかにと[h]うかがふに、前のごとく夜もすがら寝ずして、明けなばかくや画かむとやせむ、かくやあらまし、など、独りつぶやきつつして[i]臥しぬれば、住持も知らぬ顔にて過ぐししが、十日あまりにして、その鶴およそ二十四、五羽を描けり。またも夜更けて覗き見るに、こたびは肘を張り足を伸べ、手を口に当てつつ、鶴の臥したるさまを見て臥しけるに、夜明けて、かの画師がもとに住

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

持来たりて、けふ描き給へる鶴の姿は、かやうにやそめぬらむと、よべ覗き見たる姿のさまして見せければ、うちおどろき、禅師には我が描かむと<u>思ひ構へし</u>(j)心を、はやくも悟り給ふは、いかに知り給へるかと問ふに、いやとよ。昨夜そのもとの様子を、そとうかがひて<u>知り</u>(k)たりと言へば、(6)<u>画師</u>、それよりして、二枚は描かずして、杉戸の画に檜一樹を描きて出で立ちぬるとぞ。この檜を描きし後、東国へ下向の折から、東海道箱根の山中にて、檜の枝の心にかなひたるがありければ、東国へは下らずして、ふたたび泉州一国寺へ立ち越えしかば、住持見て大いにおどろき、東国へ行き給ふと聞きしに、またもや来られしは、いかなることにかと言ふに、さきに描きし檜の枝、一枝足らぬところあり。箱根にてその意を得たれば、わざわざ立ち戻りたりとて、一枝を画き添へ、いとまごひして出で去りぬとぞ。絵に魂を入るるといへるは、かかるたぐひと思ひぬと(7)<u>言へ</u>ば、ある人も感じて帰りぬ。

（『雲萍雑志』による）

〈注〉

古法眼元信　狩野元信

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問一　傍線部（1）「られし」とあるが、この部分の文法的説明として最も適当なものを次の中から選べ。

1　動詞「居る」の活用語尾＋尊敬の助動詞「る」の未然形＋過去の助動詞「き」の連体形
2　動詞「居る」の活用語尾＋尊敬の助動詞「る」の連用形＋過去の助動詞「し」の連体形
3　動詞「居る」の活用語尾＋尊敬の助動詞「る」の已然形＋過去の助動詞「き」の連体形
4　尊敬の助動詞「る」の未然形＋完了の助動詞「り」の未然形＋過去の助動詞「き」の連体形
5　尊敬の助動詞「る」の連用形＋完了の助動詞「り」の連用形＋過去の助動詞「し」の連体形
6　尊敬の助動詞「る」の已然形＋可能の助動詞「る」の連用形＋過去の助動詞「き」の連体形
7　尊敬の助動詞「らる」の未然形＋過去の助動詞「き」の連体形
8　尊敬の助動詞「らる」の未然形＋過去の助動詞「し」の連体形
9　尊敬の助動詞「らる」の連用形＋過去の助動詞「き」の連体形

問二　傍線部（2）「ひとたびだに筆を取りしこともなき」とあるが、その内容の説明として最も適当なものを次の中から選べ。

1　一回だけ絵筆を手に取ったことがあるので、寺を追放されるような重大な事態にならずにすんだということ
2　寺の近隣を逍遙する絵画制作旅行においては、一回も絵筆を手に取ったことが無いということ
3　一度限りのチャンスであるということを覚悟しつつも、絵筆を手に取ることが無いであろうということ
4　一度の絵画制作旅行において、絵筆を取ることができなかったスランプを見事に克服し事無きを得たということ
5　せめて一回でも絵筆を手に取ることがあってしかるべきなのに、一度も手に取ったことが無いということ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問三　二重傍線部ａ～ｋの動作の主体は、誰の動作なのかによって、三つに分けることができる。その分け方として最も適当なものを次の中から選べ。

1　（a b c f）・（d e i j）・（g h k）
2　（a b c h）・（d e i）・（f g j k）
3　（a b c k）・（d e g j）・（f h i）
4　（a c e k）・（d f g h）・（b i j）
5　（a c f g h）・（d k）・（b e i j）
6　（a c g h k）・（d e f）・（b i j）
7　（a d e i k）・（c f g h）・（b j）
8　（a d f g h k）・（e i j）・（b c）
9　（a d g i k）・（c e h j）・（b f）

問四　傍線部（３）「たえて筆を取らず」を十字以内で現代語に改めよ。

問五　傍線部（４）「まだきに」とあるが、その説明として最も適当なものを次の中から選べ。

1　きっぱりと
2　まだ眠いのにもかかわらず
3　朝早くに
4　無理をして
5　まだ気にかかることがあるのだが

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問六　傍線部（5）「画勢不凡にして、丹青の妙言ふべからず」とあるが、その内容の説明として最も適当なものを次の中から選べ。

1　筆の運びには勢いがあるのだがありきたりな技巧に終止しており、絵の色づかいも奇妙であり言及を避けたい
2　絵画をめぐる当時の一大勢力に属している力量は並々ならぬものがあるのだが、色づかいのバランスには欠点がある
3　絵筆を動かす勢いには素晴らしい技巧が看取され、また、丹誠を込めて描いたその姿勢にも素晴らしさがある
4　筆の運びや絵全体の力強さには並々ならぬものがあり、色づかいの素晴らしさも筆舌に尽くしがたい
5　時勢に乗る流派に属している腕前は絶品であり、また、丹精を凝らして描いたその技術は絶賛されるべきである

問七　傍線部（6）「画師」とあるが、「画師」がその後に取った行動の説明として最も適当なものを次の中から選べ。

1　鶴の絵は新たには描かず、檜を一本描いて泉州一国寺から立ち去ったが、箱根の山中にて檜が大きく成長していることに感動し、一国寺で描いた檜の絵は枝一本分の高さが不足していると思い、一国寺まで引き返し枝一本を画き足した。画き足した後も、自分の行為に対して自己批評を加えることを忘れず、惑いながらも立ち去った。
2　鶴の絵を描くことは諦め、檜一本の絵を集中して描くことで流派一番の出世を遂げることができた。後日、箱根の山中である檜の枝の様子を見て、過去に描いた檜の絵の枝には描写の技巧が足りなかったことに気付き、泉州一国寺にて最高の技術・技巧で枝を一本画き足した。別れ際、寺の人々からたくさんの餞別をもらった。
3　鶴の絵を描くことはしないで、今度は檜を一本描いて泉州一国寺を出立したのだが、箱根の山中にて檜の枝が繁茂していることに感心して、一国寺に描き残した檜の絵には枝の数が足りなかったことに不安を覚え、わざわざ泉州一国寺まで引き返して無事に一本を足して描いた。とても満足して山中で覚えた不安を取り去った。
4　鶴の絵はさらには描かずに、とりあえず檜を一本描いて逃げるようにして泉州一国寺を去った。しかし、箱根の山中で檜を見て、おざなりに檜の絵を描いてしまったことに罪悪感を覚え、一国寺まで引き返し枝一本を画き足した。ところが、過去の罪悪感は強く、とてもまごつきながら、ふたたび逃げるようにして立ち去った。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

５　鶴の絵はもう描かないで、檜を一本描いて泉州一国寺を後にした。しかし、道中の箱根の山中である檜の枝ぶりを見て、一国寺に描き残した檜の絵を納得する作品へと仕上げるにはまだ不足する部分があることを悟った。そこで、わざわざ泉州一国寺まで引き返して無事に描き切り、別れを告げてから立ち去った。

問八　傍線部（７）「言へ」とあるが、この発話の最初の五字をそのままの形で抜き出して記せ。ただし、句読点等も字数に含むものとする。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第三講　復習問題

①　「やがて」の意味として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　とうとう　イ　ひっそりと　ウ　きっぱりと　エ　うちひしがれて　オ　そのまますぐに

②　「候ひしを、…」の傍線部の助動詞の意味として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　推量　イ　使役　ウ　断定　エ　過去　オ　完了　カ　尊敬

③　「たえて答へもなくて寝たるさましたり。」の傍線部の文法的説明として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　係助詞　イ　動詞　ウ　間投助詞　エ　副詞　オ　副助詞

④　「さらにそのほかのものも食はずありければ、…」の傍線部の意味として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　ますます　イ　まったく　ウ　たいてい　エ　ふつうは　オ　ほとんど

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

⑤　次の「たまふ」に関する説明文の空欄に入る最も適当なものを、それぞれ後の中から選べ。

「たまふ」は、下二段活用の場合は［A］の意味となり、「思ふ」「見る」「聞く」に続く［B］としての用法にほぼ限られ、［C］に集中して用いられる。

ア　謙譲　　イ　尊敬　　ウ　補助動詞　　エ　会話文　　オ　地の文

A＝　　B＝　　C＝

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第三講　模範解答

問一　9　**問二**　5　**問三**　8　**問四**　全く（絵）筆を取らない（八もしくは九字）

問五　3　**問六**　4　**問七**　5　**問八**　すべて絵に

〈現代語訳〉

ある人が、私の所に来て、「絵に魂を入れると申すことは、どのようなことをして描きましたら、魂は入るのでしょうか」と問う。私は答えて言う。「全く絵には限らず、どんなことであっても真心込めてさえいたすならば、魂が入らないというものはあるはずがない。他のことはさあどうだかわからないが、絵に魂が入っていると思うのは、諸国でいろいろな名画も多い中で、私が見た（中では）和泉の国堺に一国寺という寺がある（が、その寺にある絵だ）。この寺は千利休もしばらくいらっしゃった時、風流を尽くして、庭園、座敷が五間ほどもある。一間には檜一本を描いている。一間には臥した鶴二十五羽ほどを描いてある。どちらも彩色があって、古法眼元信〔＝狩野元信〕の筆（である）と言い伝えている。その当時、この絵を描いた絵師が、この寺に滞在すること、三年くらいのうちに、何一つ描いたことがなく、碁を好んで、ただそればかりを毎日の楽しみとして、あるいはあちらこちらと遊び歩くうちに、早くも三年が経った。一度さえも筆を取ったこともないのは、何とも理解できない者だなあと思って、ある時、住職が申し上げるには、『あなたは、絵をもって一家をなしていると言いながら、筆を取ったこともなく、囲碁にだけ年月を過ごしなさるのはいかがなものか。私は、衣食の費用を厭う訳ではないが、どこへでもお行きなさい。私も用事があって、京へ上り、事によっては一年も滞在するかもわかりません』と言うと、その絵師は聞いて、『それは大変名残惜しいことでございます。そうであるならば、長年のお礼に、何か少しの絵を残して申し上げよう』と言って、心構えだけで、また四、五日ほど経つので、住職は何を描くのか見たくなりましたが、（絵師は）全く（絵）筆を取らない。ある夜、小坊主が住職の居間に夜更けて来て、ひそかに申し上げるには、『あそこに行きなさって、そっと覗いて、絵師の様子を御覧なさい』とささやいたので、（住職は）そのまま小坊主に導かれて、絵師のいる居間をうかがうと、（絵師は）明かり障子の腰板に身体を近づ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

けて、さまざまに格好を変えては、寝たり起きたりしている（その）様子を（住職は）見るとすぐに、小坊主を引き寄せ、『来なさい。覗いてはならない。早く寝なさい』と言って、自分自身も寝室に入った。夜が明けて絵師が、朝早くに起き出して、一間の障子に描いたのを（住職が）見ると、みな臥した鶴である。筆の運びや絵全体の力強さには並々ならぬものがあり、色づかいの素晴らしさも筆舌に尽くしがたい。そうではあるが、次の夜はどうかと（住職が）うかがっていると、前夜のように一晩中寝ないで、夜が明けたらこのように描こうかとしているのだろうか、『このようにしようか』、など、ひとりで呟きながら寝たので、住職も知らない顔で過ごしていたが、十日余りで、その鶴およそ二十四、五羽を描いた。さらにまた夜が更けて（住職が）覗いて見ると、今度は肘を張り、足を伸ばし、手を口に当てて、鶴が臥した様子を（住職は）見て寝たが、夜が明けて、その絵師の所に住職が来て、『今日描きなさった鶴の姿は、このように色をつけたでしょう』と、昨夜覗いて見た姿の様子を見せたので、驚いて、（絵師は）『あなたには私が描こうと思っていた心を、早くも悟りなさるのは、どうして知りなさったのか』と問うと、『いや、そうではない。昨夜あなたの様子を、そっと覗いて知ったのだ』と言うので、絵師は、その後、二枚とは描かずに、杉戸の絵に檜一本を描いて出ていってしまったということだ。この檜を描いた後は、東国へ下向する時、東海道箱根の山中で、檜の枝で理想通りの枝があったので、東国へは下らず、再び和泉の国の一国寺へやって来たので、住職は（絵師を）見て大いに驚き、『東国へ行きなさったと聞いたのに、またいらっしゃったのは、どうしたことか』と言うと、（絵師は）『以前に描いた檜の枝は、一枝足らないところがある。箱根でそのことに気がついたので、わざわざ戻ってきた』と言って、一枝を書き添え、別れを告げて去ったということだ。絵に魂を入れるというのは、このようなことだと思った」と言ったところ、ある人も感動して帰った。

〔重要単語〕

○そのかみ【其の上】…①**その当時。**　②過去。昔。

○いとふ【厭ふ】…①**いやだと思う。**　②大事にする。

○やがて…①**そのまま。**　②**すぐに。**

○まだし【未だし】…①**まだ早い。**　②**未熟である。**

○よもすがら【夜もすがら】…**一晩中。**

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第三講　解答解説

〔解説〕

① 「やがて」は重要単語で、「すぐに・そのまま」の意味。よって、正解はオ。

② **連用形**に付く「し」は**過去**の助動詞「き」。よって、正解はエ。

③ 「**たえて**～打消」は「呼応の**副詞**」で「まったく～ない」と訳す全否定。よって、正解はエ。

④ 「**さらに**～打消」も「**まったく**～ない」と訳す全否定の呼応の副詞。よって、正解はイ。

⑤ **下二段**活用の「たまふ」は**謙譲語**。動詞の下に付く補助動詞で、**会話文・手紙文中のみで使用**される。ちなみに、謙譲の補助動詞の「たまふ」の**主語は必ず一人称**（会話主）になる。

〔解答〕

① オ　② エ　③ エ　④ イ　⑤ A ア　B ウ　C エ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。